

事例報告③

紀要の電子化で変わったこと

聖学院大学総合図書館 菊池 美紀

本学は上尾市にあり、3学部6学科と大学院からなる学生数2,700人程度の小規模大学である。キリスト教のミッションのもとに建てられ、建学の精神として「神を仰ぎ、人に仕う」を掲げている。

本学の紀要は『聖学院大学論叢』である。図書委員会内に設置された論叢委員会が編集を、その事務を図書館が担当している。2002年のNIIの学術雑誌公開支援事業をきっかけに電子化を検討したが反対があり、電子化はこの事業に頼らず、段階的に進めることになった。電子化の方針を作成するかたわら、CD-ROMを配布するによりWeb版のイメージを共有。また個別に電子化の許諾をとるようにしたことで反対はなくなり、翌年にはHP上での公開にまでこぎつけた。2007年には投稿規程に“電子化を原則とする”ことが明記された。この時のデータがリポジトリ「SERVE」の核となっていった。

紀要の電子化により変わったことが4つある。1つは、図書館と紀要との関係である。紀要に図書館が積極的に関わるようになり、規程の作成と運用の見直しを行った。これにより論叢委員会の権限や役割が明確になり、図書

館の業務に「委員会活動」がはっきりと位置づけられた。2つ目は印刷所である。2008年、電子化を含めた提案による相見積もりを実施した。結果、作成費用は抑えられ、校正を補助するサービスが追加された。3つ目は発行部数である。アンケートによる送付先の見直しと停止、保存のための余部作成の停止から発行部数が段階的に削減された。それは結果として、保管場所と予算の削減にもつながっていった。4つ目はリポジトリ「SERVE」の構築とCSI委託事業の採択である。「SERVE」は図書館の活動を大きく広げた。

現在は、印刷所を移行して2年目である。慣習が見直され、運用が透明化されてきた。それは「SERVE」によるWeb公開という効果と共に、『論叢』への投稿増加に繋がっている。また『論叢』に関わることで、あまり図書館を利用されない先生方との接点もうまれた。さらに図書館に対する意識も少し変化してきている。「最近の図書館は頑張っているよね」といった言葉も複数いただいた。こんなにうれしいことはない。その意見がより多くの先生や職員に広がっていくように活動をしていきたいと思っている。